

DAM グッドイナフ人物画知能検査を用いた重度認知症者の認知機能評価の可能性

○後藤貴浩¹・海谷夏海²・宮崎和之³・石井 洋²

(¹医療法人小島慈恵会小島病院・²医療法人仁泉会川崎こころ病院・³みやぎ県南中核病院)

キーワード：DAM グッドイナフ人物画知能検査，重度認知症，認知機能

A study of the possibility DAM can evaluate cognitive function of severe dementia patients.

Takahiro GOTO¹, Natsumi KAIYA², Kazuyuki MIYAZAKI³, Hiroshi ISHII²

(¹Ojima Hospital., ²Kawasaki Kokoro Hospital., ³South Miyagi Medical Center.)

Key Words: Draw a man test(DAM), Severe dementia, Cognitive function

目 的

認知症において継続的な認知機能評価は病状進行の把握や適切なケアの提供などを検討する上で重要である。しかし重度認知症者の場合、スタンダードな認知機能検査（MMSEやHDS-R等）では床効果や教示理解の困難等があるために適応が難しい場合がある。重度認知症者向けに開発された認知機能検査（Severe Impairment Battery等）もあり、有用だが、やはり「知的作業を課す」という点で被験者への相応の負担がある。また認知課題等が認知症者にとって侵襲的でなじみが薄いものとされ、拒否にもつながりやすい。今後の高齢化社会を見据え、特に通所サービス等にも簡便に実施できる重度認知症者用の検査の需要が高いと考えられる。実施の簡便さや抵抗感の低さ（侵襲性の低さ、課題へのなじみやすさ）などから有効な心理検査として描画検査がある。バウムテストなどの描画を用いた認知機能評価の報告もあり（黒瀬，2013），描画が認知症者の認知機能を反映し得る可能性は高い。既に時計描画検査（CDT）が臨床場面でも有用とされているが（福居，2006），重度認知症者には難易度が高くなってしまう。低難易度の描画検査としてDAMグッドイナフ人物画知能検査（以下DAM）がある。これは幼児～学齢児の知能（認知機能）を人物画から推定するものであり，簡便でかつ検査としての妥当性も高い。しかし，DAMが重度認知症者の認知機能を評価し得るかどうか検討した報告はない。そこで本研究では，この点について仮説検証型の研究を行う。

方 法

DAMが重度認知症者の認知機能評価に利用できることを検証するため，本研究では「重度認知症者によるDAMの結果は，スタンダードな認知機能検査と一定の相関関係を示す」という仮説の下，調査を行うこととした。

対象は，A病院重度認知症患者デイケア（以下認知デイ）に平成29年11月から平成30年4月までの間に利用した者で，そのうち①鉛筆を把持でき，②描画指示に従え，かつ③1年以内にMMSEを実施していることを条件にしたところ，23名が抽出された。手続きは，認知デイプログラムの「創作活動」の一環で人物画を描くことに同意し，上記条件に該当した利用者にDAMを実施した。ここで得られた結果（DAM素点）と条件③のMMSEの結果（項目4は逆唱）との相関係数を算出した。解析にはSPSS 11.0-J for Windowsを用いた。

尚，本研究手続きは，医療法人仁泉会川崎こころ病院倫理委員会の承認を得ている。

結 果

参加者全体の平均年齢は83.38±6.68歳であった。また女性が19名と全体の8割以上を占めた。疾患はアルツハイマー型

認知症が14名（60.87%）と最も多く，次いでレビー小体型認知症が4名（17.39%）であった。教育年数の平均は8.61±2.27年で，中学校卒業が最も多かった。認知デイ利用期間の平均は513.17±468.22日と約1年半程度だが，ばらつきも大きかった。MMSEの平均は15.25±6.41点で，DAM素点の平均は17.25±11.86点であった。

MMSEとDAM素点の相関係数は，0.81と非常に強い相関を認めた。Figure 1に散布図を示す。

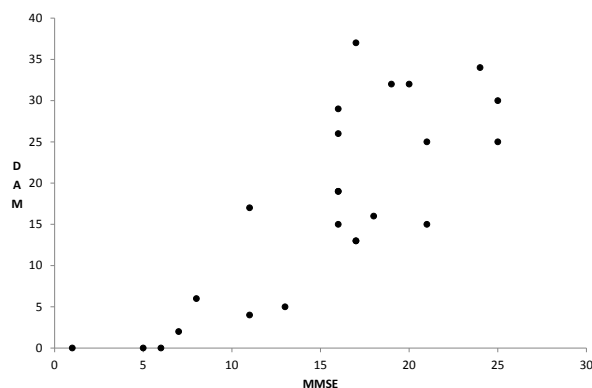


Figure 1 MMSE と DAM 素点の散布図

考 察

本研究の結果，仮説が支持され，DAMはMMSEとかなり強い相関関係を示すことが明らかになった。つまり，DAMは重度認知症者の認知機能を評価し得る可能性が示されたと言える。本研究結果を援用すれば，認知デイや介護保険の通所リハビリテーション施設等においてプログラム内で行う描画等を利用して簡易に認知機能評価を行うといった介入が可能になり得る。

但し，本研究の限界として，あくまで相関関係が示されたに過ぎず，認知機能をどの程度妥当に測り得ているものかは不明である。また描画による評価という特質上，言語的側面の認知機能は測り得ない（逆に言語表出困難な認知症者にも施行できるという利点はある）。あくまで非言語的認知機能を計測しており，補助的な評価とみなすべきと言える。

引用文献

福居顯二（監訳），成本 迅・北林百合之介（訳）（2006）．臨床家のための認知症スクリーニング 新興医学出版社．
黒瀬直子（2013）．アルツハイマー型認知症の進行を予測するバウムテストにおける指標の検討 心身医学，53，404-407．

Takahiro GOTO.